

普及活動情勢報告（平成18年7月分）

安芸農業振興センター 農業改良普及課

情勢報告

施設野菜の土づくりに、家畜ふん堆肥をPR！



写真右：畜産農家代表
（東部地域畜産堆肥利活用
推進委員会会長）

6月30日に開催された JA 土佐あき園芸研究会試験展示圃成績発表会において、施設野菜の新園芸年度に向け、家畜ふん堆肥利用のPRを行った。担当普及指導員と畜産農家代表者が、105名の園芸農家と関係機関の前で、スライドを用いて「東部地域畜産堆肥利活用推進委員会」の活動内容や、各畜産農家の堆肥製造現場の紹介を行った。また、会場において、8点のサンプル展示とパンフレットの配布を行った。なお、当日の試験展示圃成績書には堆肥利用の実証試験結果も掲載した。

これまでの施設園芸農家向けのPR活動により、少しずつだが着実に利用農家戸数は増加している。7月以降からは果樹栽培農家に向けた堆肥利用のPR活動を計画している。

本園芸年度の集大成 ～試験展示圃成績発表会～が開催される



熱心な生産者が大勢集まりました。

6月30日（金）JA 土佐あき園芸研究会の試験成績発表会が開催され、生産者や関係機関職員105名が参加した。

今年は、品種試験（14課題）やIPM技術（12課題）などを中心に全39課題の成績がまとめられ、うち8課題を生産者自身がスライドを用いて発表した。

また発表会にひきつづき、施設野菜の主要害虫であるコナジラミ類防除に対する微生物資材や土着天敵の利用法について、宮崎県中部農業改良普及センターの普及指導員と高知県農業技術センターの研究員による講演会が行われた。

来作でも、様々な試験圃・展示圃を設置し、園芸研究会とともに、よりよい技術の確立・普及にとりくむ。

農作業での暑さ対策の普及



夏時期のハウス内は高温環境での作業となり、ハッピーファームと川谷農園から暑さ対策について支援希望があった。熱中症を防ぐ対策として「農作業衣（扇風機付き）」と特許取得帽の試着実証」「作業帽の作り方の資料配付」および「熱中症予防方法の説明」を行った。

その結果、ハッピーファームでは、環境省から出されている熱中症マニュアルをもとに、農作業着等の試着実験を梅雨から盛夏にかけ実施している。また、中間気候室に冷凍冷蔵庫や着替えコーナーを設置するなど、環境改善が行われた。川谷農園では説明会の後、試着も行われ、作業員個々の体力にあわせた予防をはじめ、帽子の購入、水分の補給、こまめな休憩などにより温度管理に工夫を怠らなかつた。

猛暑に向け、さらに検討をすすめていく。

農村女性サミット実行委員会三段階で準備会



合同実行委員会

今年度は安芸管内最東部地域の東洋町で第 10 回「農村女性サミット 2006」開催となった。

同じ安芸郡とはいえ、芸西村から 70 キロある東洋町には足を運ぶことも少なく、「行ってみたい」との多くの女性リーダーの声を受け、東洋地区農漁村女性グループ研究会と東洋町女性リーダーは、ポンカン栽培農閑期の夏期開催に向けて検討してきた。5 月 23 日の安芸地区女性リーダー協議会で東洋町での開催を決定し、テーマや内容を決めた。6 月 21 日には、開催会場において、東洋地区農漁村女性グループ研究会と合同の実行委員会を開催し、役割分担等実施計画を協議した。6 月 30 日には東洋町の女性リーダーやグループで細かい調整について話し合いをした。

農村女性サミット 2006！イン東洋町「東洋の香と功名にかけた女たち！」



郷土料理こけらずしの体験

今年度はサミットも第 10 回目で初めて東洋町で開催した。東洋地区農漁村女性グループ研究会と女性リーダー協議会が合同で主催、生産者や消費者約 90 人が参加した。

まず、東洋地区農漁村女性グループ研究会により、我が町を P R しようと郷土料理「こけらずし」の体験や東洋町のええところ紹介が行われた。ひきつづき、この 10 年間の女性リーダー活動のスピーチ合戦が行われた。アトラクションは「ピバ！家族経営協定」、劇団女性リーダーのユニット「芸農人」によるもので、パートナーシップ型農業経営のために、家族の話し合いの大切さを楽しく P R した。

平成 18 年度農業改良普及推進協議会が開催される



7 月 7 日、田野町ふれあいセンターにおいて、普及指導活動の理解と協力を求めるために、農家代表と市町村、農協等関係機関の職員により協議会を開催した。

特に、普及計画の重点課題である「ナスの高品質・多収技術の確立による経営の発展」等を中心に農業経営改善につながる目標値の考え方や生産組織のあり方など議論が深まった。

また、情報提供として「ポジティブリスト制度」や「農地・水・環境保全向上対策」を説明した。

ゴカイ養殖から完全撤退！！ 新規作物の導入を検討する



羽根地区のゴカイ養殖は価格安から、平成 18 園芸年度より、一部を促成ナスに転作していた。平成 19 園芸年度は、ゴカイ養殖から完全撤退し、農家の意向で促成ナスと抑制キュウリ + 新ショウガ（約 40 a / 4 戸）の作付け体系で取り組む予定です。新ショウガの導入は初めてであり、J A と連携して先進地視察研修や勉強会を開催し、また、販売についても協議している。